

# 福島との息の長い協働を

早いもので、東日本大震災から3年もの月日が過ぎました。とりわけ、地震・津波に引き続き福島第一原子力発電所事故に襲われた福島県民の苦難は、世界唯一の原爆被ばく医科大学を前身とする長崎大学にとっては、他人事ではありえません。事故直後から、大学をあげて福島県支援活動に取り組みました。直後のクライシス状況下における放射能汚染に係る危機管理に始まり、その後は原爆ヒバク影響研究の伝統を引き継ぐ原研の教員が常駐し、福島県民の被ばく健康リスク管理という、世界が目指す重要な役割を果たし続けています。

福島では、いまだ原発廃炉の目途は立たず、除染もままならず、住民の安全・安心には程遠い状況です。しかし、福島は新たな局面を迎えています。課題を抱えつつも、新たな未来に向けての胎動が、



さまざまな場面で始まりつつあります。復興への長い道のりの第一歩が踏み出されているのです。

長崎大学も、いま改めて、科学や大学は何ができるのか、何を為すべきなのかを問い直し、これまで以上に実質的な支援・協働を可能とする体制を再構築したいと思います。

2013年4月には、福島県初の「帰村宣言」をした川内村と包括連携協定を締結し、村役場内に教育研究拠点を設置し、保健師を常駐させ、放射線影響調査や住民の健康管理など、住民の帰村支援を開始しました。避難生活を余儀なくされている住民の方々が安心して故郷に帰還し、新しい生活を開始することから真の復興が始まります。

被災地の未来創造に向けた長崎大学と福島との息の長い協働が、これからも続きます。

長崎大学長 片峰 茂

## CONTENTS

長崎大学広報誌  
[チョーホー]  
Choho Vol.47

本誌記事を長崎大学関係者が転載する場合は、「長崎大学広報誌Choho vol.〇から」と明記してください。学外の方は、事前に広報戦略本部までご連絡願います。

学長室だより	福島との息の長い協働を	1	表紙のはなし
特集	福島の復興と長崎大学	2	春、水産学部の乗船実習が始まります。今はまだ、救命胴衣の装着法から学ぶ彼らですが、これから水産学部の練習船・鶴洋丸での3泊4日の乗船実習に始まり、少しずつ航海の日数をのぼして海の上に慣れていきます。撮影はまさに最初の実習直前。「酔うかも……」と緊張気味の学生もいました。
地域で活かされる長崎大学の「知」	小浜バイナリー発電	13	
長崎大学のいま!	水産学部	15	
大学はわたしの仕事場	張笑男	19	
Information	フォトコンテスト、公開講座	21	
	長崎大学「通」クイズ	22	
	編集後記	22	